

トランスジェンダーを生きる当事者と家族 —人生イベントの羅生門的語り

荘島幸子 京都大学教育学研究科
Sachiko Shojima Graduate School of Education, Kyoto University

要約

本論は、性同一性障害と診断を受けたトランスジェンダー当事者と家族が経験する病いに、羅生門的にアプローチした質的研究である。従来の研究は、性別や身体に強い違和感を持ち、手術によって性別移行する当事者のみに焦点を当てたものが多く、当事者を取り巻く他者には関心が向けられてこなかった。しかし、TG 当事者の迎える身体的・心理的・社会的水準における複合的な生き難さ、すなわち病いの経験は当事者や他者を含んだ多層的な視点から捉えることが重要である。そこで、病いは他者との間で「互いに経験される」という認識のもと、本論では、トランスジェンダー当事者にとって最も身近な他者である家族の病いの経験について取り上げ、1 家族を対象にインタビューを行った。結果では、母子の羅生門的語りから、彼らが経験した 2 つの重要な人生イベント—不登校イベント・トランスジェンダーイベント—が浮かび上がった。イベントへの意味づけも母子によって異なっており、イベント間をつなげる説明物語も、子が性同一性障害と認知した前後で、母子ともに大きく変化していた。他の家族成員によるイベントへの意味づけからも、家族成員がそれぞれの立場から家族に関与し続けている様相が明らかとなった。

キーワード

性同一性障害, トランスジェンダー, 家族, 互いに経験される病い, 羅生門的語り

Title

A Transgender Person and Family: Rashomon-like Narrative of Life Events

Abstract

The illness experience of a transgender person (medical term: gender identity disorder) and his family was investigated using a Rashomon-like approach. Previous studies have focused only on persons who feel a strong identification with the other gender and undergo sex reassignment treatment, so those studies did not consider other people close to the transgender person. However, the key to understanding the illness experience of a transgender person is to view it from multiple perspectives including those of people close to the person. In this study, recognizing that illness is experienced between people, the illness experiences of a transgender person and his family (mainly his mother) were topicalized by interviewing each person several times. In conclusion, the Rashomon-like narratives of the interactions between a transgender person and his mother revealed two major events in their mutual experiences. One event means "the event of experiencing school refusal", the other event means "the event of experiencing gender identity disorder". Their narratives describing these events diverged at around the time the transgender person recognized that he was a transgender male. Meanings of events created by other family member indicated that each family member have got engaged in family situation.

Key words

gender identity disorder, transgender, family, illness experienced between each other, Rashomon-like narrative

問題

はじめに

本論は、生まれ持った身体に違和感を持ち、外科的処置によって身体を別の性別に変更することを望むトランスジェンダー (transgender, TG) と呼ばれる当事者とその家族の辿った生き難さの経験とその意味づけ、すなわち病いの経験 (Kleinman, 1996/1988) に、羅生門的手法 (Rashomon-like technique; Lewis, 1986/1961) を用いてアプローチした事例研究である。

TG とは、広義には、性別の越境を試みる者を意味する (相馬, 2004)。TG に類似した用語に、「身体的性別 (sex) と性自認 (gender identity) に不一致がある状態」と医学的に定義される性同一性障害 (gender identity disorder, GID) がある。近年、個人の性別の越境の仕方が多様であることが明らかとなり、当事者が「GID」という障害名によって自分の性の在り様を説明するのではなく、多様な選択や生き様に開かれた「TG」と自身を表現し始めている (Califia, 2005/1997)。本論では、性別や性自認に違和感を持つ者を、「性別の変更を試みるプロセス」(Stoller, 1971) を主体的に生きる者とみなし、「TG 当事者」と呼ぶ。

TGの病いの経験

GID には、A. 反対の性に対する強く持続的な同一感、B. 自分の性に対する持続的な不快感や、性役割についての不適切感、C. その障害のために臨床的に強い苦痛または社会的、職業的、または他の重要な場での機能に障害を起こしている、という3つの基本症状がある (山内・庄野・加澤, 2001)。GID 当事者は、その多くが小学校入学以前から性別違和感を持ち、31.1%が不登校を経験し、また、80.0%が自殺念慮をもち、42.6%が自殺未遂や自傷行為を行っていると報告されている (中塚・小西・工藤・永井・公文・光嶋・佐藤・山本・黒田, 2003)。学校、職場での社会的な軋轢や、家族やパートナーとの葛藤は、当事者に

羞恥心、罪の意識、混乱、孤立、差別、抑うつ、自殺、放浪、引きこもりといった否定的感情や行動を引き起こす (山内ら, 2001)。

このような TG 当事者の身体的・心理的・社会的水準の複合した生き難さに接近を試みる場合、クラインマン (Kleinman, 1996/1988) の病いの概念が、有用である。クラインマンは、病気の分析概念を、①疾患 (disease)、②病気 (sickness)、③病い (illness) の3つに分けている。①疾患とは、医療従事者により生物学的に解釈され定義づけられたものであり、②病気は、マクロな制度 (政治・経済・マスメディア) の中に位置づけられるもの、そして、③病いは、病む人や家族を中心に知覚された心理的、社会的な経験と意味づけを含むものである。これら3つを TG 当事者の生き難さと対応させると、①疾患は、GID の医学・生理学的側面を指す。②病気は、GID の診断と治療ガイドライン (日本精神神経学会, 1997) の制定に伴い、GID という精神疾患が社会に生み出されたという社会的側面を表す。③病いは、症状や障害を、それを患う本人や家族といったより広範囲の人々の視点から捉える際に用いられる用語である。病いの概念の導入によって、外部 (例えば、医師や診断基準) から客観的に規定される症状や障害概念におさまらない、病気と共に生きる人々の個人的、主観的体験に焦点を当てることが可能となる。

病いの概念における病いの経験とは、病む人やその家族がどのように症状や障害を認識し、それとともに生活するのかを示すものであり、病む者やその家族の主観的世界を意味する。本論で、クラインマンの概念に着目する意図は、病む者の主観的世界への接近にとどまらず、病む者の病いの経験を多層的 (本人、家族、より広範囲の人々) に捉えられる点にある。病むという経験は、他者との相互関係に規定される社会現象とされるにもかかわらず (清水, 1992)、従来の病いの研究では、病いを持つ個人の主観的世界や意味づけの把握に重点が置かれる傾向にあった (Williams, 1984 ; Conrad, 1987 ; Frank, 1993, 1995 ; Kleinman, 1996/1988)。例えば、性的少数者の問題を扱う研究分野でも、家族やより広範囲の人々の経験に着目した研究は少ないことが指摘されている (Savin-Williams, 1998)。そこで、本論では、病む者と周囲の他者の間

で生み出される経験や意味づけへと着目点を移行する。その必要性和意義について、次節で心理学、社会学、文化人類学などの諸領域における具体的な研究をいくつか列挙し、説明する。

他者との間で経験される病い——家族に着目して

マクダーモット (McDermott, 1993) は、「学習障害児」と評価された男児を学校内外の様々な文脈で観察し、教育的場面における男児と周囲の他者による語りの実践（「学習障害児」として提示、注目、記録、説明されること）が男児の「無能さ」を強調し、その結果、「学習障害」という神経学的問題とみなされるプロセスを社会構成主義的見地から描いている。エスノメソドロジーの立場から、スミス (Smith, 2004/1978) は、ある人間がその友人によって精神病と定義される経緯を詳細に記述し、当該個人が診療という公式的なプロセスを受ける前に、「精神病院に至る経路」においてすでに家族や友人によって、多くの非公式的な「精神病」認定の準備作業がなされていると主張する。

これらの研究は、個人がある障害を持つ者として認識されていく（個に障害が内在化する）状況や過程に焦点を当てるのに対し、診断を受けた後の周囲の他者との相互過程を分析する研究もある。土屋 (2004, 2007) は、脳梗塞に倒れた父親の看護に付き添うという自らの経験に基づき、家族や周囲の他者との対話の中で、父親の「声」(Bakhtin, 1979) が生まれる過程及び対話相手との固有な関係の変容を描いている。慢性疾患患者を持つ家族が経験する社会的、心理的問題については、病いの軌跡という概念が提起されている (Strauss, Corbin, Fagerhaugh, Glazer, Maines, Suczek, & Wiener, 1984)。慢性疾患患者の病いの軌跡（疾患の生理学的展開だけでなく、それに伴って行われる仕事の「総合的編成」と、それに携わっている人々への「影響」）は、単に病者の身体的状態を反映するのではなく、病気の及ぼす様々な影響についての医師や家族や友人の定義づけ (definition) とも深く関係している。これは、クラインマンが病いの第4の意味として説明する「病いを説明しようとして生ずる意味」に通ずるものである。そして、病いの軌跡においては、家族の

物語は、病いを際立った登場人物としながら、家族成員を疲労困憊させると同時にエンパワリングする「情緒的るつぼ」(McDaniel, Hepworth, & Doherty, 2003/1997) へと導かれ、家族成員のアイデンティティも変化していく。マーフィー (Murphy, 2006/1990) は、死に至る病いに冒された自分自身と家族や社会をフィールドワークし、病いによる不均衡な社会的人間関係が病者に深刻な影響を与えるると述べている。

梅津 (1997) は、重度・重複障害児との関わりから、彼らが持つ「障害」は、個人に内在し、外部から客観的に把握されるものではなく、障害を持つ人とその周囲が対面し、接触し合うときに経験される「とまどい」や「とどこおり」であるとし、そのような状況を相互障害状況と呼んだ。梅津の意図する障害の概念は、他者との関わりの中で「互いに経験される」という点において、クラインマン (1996/1988) の病いの概念と共通項をもつ。「個人に内在すると考えられていた障害や疾患は、当事者と他者の双方に『互いに経験される』ものとして、見方の転換を図ることで、当事者と居合わせる人びとの経験の重要性が浮かび上がってくる。さらに、「障害者」「患者」と名指しされ、他者から分け隔てられた者（例えば、Becker, 1993/1963 ; Goffman, 2001/1963 ; Laing, 1973/1967) が、他者との関わりの中で経験される相互障害状況や病いの経験を主体的に生きている人間的存在として捉え返される可能性をもっている。

本論では、TG 当事者に関わる他者として、家族、なかでも母親を中心に上げる。家族とは、多層的な意味や関係性が発生する場であり、多方向性に開かれながら常に変容し続ける生成的な場である (Mugnusson & Stattin, 1998)。当事者と家族及び母親の関係性を扱ったものには、家族の離婚など複雑な家族関係についての実態報告 (山内ら, 2001) や、当事者の母親にみられる抑うつ傾向や境界性人格障害に関する研究 (Marantz & Coates, 1991)、家族に対する当事者の依存性を調査した研究 (福井・矢野・西村, 2002) がある。これらの研究は、当事者を GID という外部から規定される障害を持つ者とみなし、GID が原因となって、ある否定的な結果を引き起こすという障害内在論、因果関係論の立場に立つ。本論では、当事者が疾患を持っていることを前提とせず、性別を移

行するプロセスを生きる TG 当事者と捉え直す。そして、TG 当事者と家族の双方に互いに経験される病いについて、当事者だけでなく、家族を含んだ多層的な視点から捉える。

目的

問題の項では、TG 当事者の辿る身体的・心理的・社会的水準における複合的な生き難さ、すなわち病いの経験を多層的に捉えることの重要性を述べ、病いが他者との間で「互いに経験される」として、認識の転換を図った。さらに、TG 当事者の生き難さは、当事者と最も身近な存在である家族との間で互いに経験されるという視点から、ある 1 人の TG 当事者とその家族（主に母親）の間で、互いに経験される病いを理解することを目的として、以下の 2 つのリサーチクエスチョンを設定した。

リサーチクエスチョン 1

TG 当事者とその母親の語りをもとに、母子が経験した人生上の出来事（以下、人生イベント）を明らかにし、人生イベントに対するそれぞれの意味づけから、母子に互いに経験される病いを明らかにする。

リサーチクエスチョン 2

リサーチクエスチョン 1 で見出された母子の病いの経験に対する他の家族成員ら（妹、父）の語りから、彼らの病いの経験を記述する。母子以外の家族成員らの病いの経験を聴き取ることで、TG 当事者を抱える家族に生じる輻輳的な状況を明らかにし、家族全体をより深いレベルで把握することが狙いである。

方法

研究参加者及び研究者と研究手続き

研究参加者は、TG 当事者のハル、母親のソラ、妹

のアキ、父親のマサの 1 家族である（名前は全て仮名であり、敬称を略す）。表 1 に、家族成員の概要と²⁾ 研究者の関わりを示した。表 2 は、インタビューの概要である。実施日とインタビュー相手、インタビューとの関係性、研究者に浮上した問いと感情について具体的に記した。なお、マサには、数回にわたり筆者及び家族成員からインタビューを働きかけたが、フォーマルな形でのインタビューは行えなかった。研究者に浮上した問いと感情とは、語りが生み出される文脈の 1 つとして、筆者がいかに家族に関わっていたのかについて提示したものである。提示にあたっては、インタビューに挑む前の研究者の心構えや問い、インタビューの状況やインタビュー後の感想を記録したフィールドノートを参照した。

羅生門的語りという分析視点

家族の病いの経験を捉えるには、家族成員による語りが有効とされる (Walton, Gerson, & Rose, 2005)。ルイス (Lewis, 1986/1961) は、各々の家族成員が語るライフヒストリーから家族を描き出すことを試み、その手法を羅生門的手法と名づけた³⁾。小林 (1994) は、羅生門的手法について、①出来事を個人の語る経験によって描く、②出来事を複数の視点から眺め、複数の経験を並列させて提示する、③複数の「経験の物語」の重ね合わせによって出来事の多面性がみえるという 3 点を指摘している。この指摘を家族の病いの経験に対応させると、①人生イベントを家族成員の語りから描く、②人生イベントを複数の視点から眺め、複数の経験を並列させて提示する、③複数の「病いの経験の物語」の重ね合わせによって出来事の多面性がみえる、ということができよう。

羅生門的手法は、時間や空間・場所と関連するアプローチである。例えば、西暦というクロノロジカルな時間や、年齢や結婚、出産などのライフサイクル的な時間、戦争といった歴史的な時間を指標として家族の語りを構成することは、家族のライフストーリーの整合性を高めるという (桜井・小林, 2005)。さらに、羅生門的手法は、語りが生み出されることを示す心理学モデルでもある (やまだ, 1996)。家族を空間的・時間的な場所として眺めるならば、羅生門

表1 家族成員の概要と研究者の関わり

TG 当事者 (子): ハル

1980 年生まれ。第 1 回インタビュー時、22 歳。20 歳時に GID と診断を受け、性別適合手術（胸除去・ペニス建設）に向けて治療継続中。周囲にカミングアウトし、パートナーと同居している。職業は専門職。知的好奇心が強く、積極的である。

母親: ソラ

1948 年生まれ。ソラ第 1 回インタビュー時、55 歳。人と関わる専門職に従事し、毎日忙しく過ごしている。定時制高校卒業後、ソラは勉学に専念した。職に就いてからは、子育てと仕事の両立を図り、生活してきた。話し声ははきはきとしており、エネルギー溢れる母親という印象である。ハルの妹のアキは、家族で起きたいろいろなイベントでは「お母さんが一番苦労している」というほどに、ソラは家族の状況に対してこれまで熱心に行動を起こし、対処してきた。子ども（ハル）が「GID」当事者として生きていくということについては、混沌とした想いを抱えている。

妹: アキ

1983 年生まれ。アキ第 1 回インタビュー時、20 歳。将来の夢に向かって、フリーターをしている。天真爛漫で、よく笑う親しみやすい女性である。家族の中で、最初にハルからのカミングアウトを受けた。いまでは姉が TG 当事者であることは、何も気にしていないという。

父親: マサ

1945 年生まれ。マサとの接触時、60 歳。定年退職後は、趣味に没頭する日々を送っている。マサは、子どもたちから「シャイ」「無関心」「よくキレる」などといわれている。ハルが TG 当事者として生きていることに対しては、「本人がそれでいいんだったら、いい」という。ハルの病院への付き添いも、母親に代わり、何を気にするともなく付き添っている。

研究者

筆者は、初めてハルに出会った 2002 年から 2007 年現在に至るまでの間に、心理学専攻の学部生から大学院に進み、途中臨床心理士資格を取得し、臨床の実践に関わるようになった。研究参加者の家族との関わりは、治療を伴ったものではないが、臨床心理学的な知見を動員した聴き取りを行ったり、インタビュアーから意見を求められる場面では、可能な限り対応していた。また、家族と研究者の関係を確認する目的で、臨床心理士によるスーパーヴィジョンの機会を一度設けている。

的手法によって、家族の語りの重なり新たな意味を見出すことができる。本論では、家族の語りの重なりを「羅生門的語り」と名づけ、当事者と他者双方の経験や意味の問題を扱う点において有効な視角であると判断した。

分析の手順**リサーチクエストions 1 の分析手続き**

分析データは、インタビューによって得られたハルとソラの語りデータ⁴⁾である。母子の語りデータには、ハルの長期にわたる不登校イベントと、TG に関する人生イベントについての語りが多くみられた。そこで、不登校及び TG に関する人生イベントを母子が深く関与した 2 大人生イベントと設定したうえで、次の分析を行った。

まず、①分析データから、母子それぞれが 2 大人生イベントについて言及している語り（母子の羅生門的語り）を全て抜き出した。②インタビュー中、時間軸を越えてばらばらに語られていた語りを整理する目的で、①の 2 大人生イベントについての母子の語りデータをそれぞれ時系列順に並べ替えた（2 大人生イベント×ハル・ソラの組み合わせで 4 通りできあがる）。③時系列に沿って並べ替えた人生イベントについての 4 通りの語りデータを何度も読み直し、それぞれの人生イベントの時間の流れのなかに、母子の経験が変容する契機となっている人生イベント（図 1、図 2 及び本文中では、**四角**で囲んで表示した）をボトムアップ的に構成した。④母子が、構成された人生イベントに対して付与する意味づけから、互いに経験される病いについて検討した。

表2 インタビューの概要

実施日(y/m) インタビュー相手	インタビューとの関係性	研究者に浮上した問いと感情
2002.8 ハル 第1回	インタビュー／インタビューという形式的な関係性から始まる（不登校に関する卒業論文を作成するため、指導教官からハルを紹介される）。	ハルからはソラについての話が出ない。ハルとソラの関係性は良好だろうか？ソラは、ハルをどうみているのだろうか？
2002.11 ハル 第2回	ハルから GID に関するカミングアウトを受ける。秘密を共有したためか、それまでのインタビュー／インタビューの関係性が、次第に友人関係を帯びはじめ、研究以外でもメールのやりとりを行うようになる。	母子関係について尋ねるも、答えが返ってこないことへの違和感。ハルはソラとどのような関係を持っているのだろうか。一体ソラは、ハルが GID であることをどう受け止めているのか。
2003.1 ハルインタビュー エントリー	ハルへのインタビューエントリー。友人関係を保ちつつ、ハルが GID 研究の「共同研究参加者」を名乗り出る。	研究目的を「ハルの GID 当事者としての生き様に接近し、内側の視点から記述すること」に設定する。
2003.3 ハル 第3回	ハルには、友人関係を基盤としながら、研究参加者としてインタビューを引き受けてもらう。	性別を移行することについての話がメインとなる。
2003.5 ハル 第4回	ハルとハルのパートナー（女性）が同席したインタビュー（2003.3 にインフォーマルな場面でパートナーを紹介してもらっている）。	ハルがパートナーと同席しているのを目の当たりにし、より「男」寄りの存在としてハルを認識しはじめ。
2003.5 ソラ 第1回	ソラとはインタビュー以前に、不登校の会などで会う機会があり、お互いに認識があった。私が臨床心理学の道を歩んでいることを、自らの経験談と照らし合わせながら、社会に必要だといって応援してくれる。私も、ソラの話の聴きながら、何かを返したい気持ちになる。	ソラは、ハルが GID であることが受け止めきれないようだ。ソラはハルとの関係をいかに語り、ハルの生き方についてどのような感情を抱いているのか。また、子どもが GID であることをどう意味づけているのか。
2003.9 ハル 第5回	ハルには、友人関係を基盤としながら、研究参加者としてインタビューを引き受けてもらう。	ハルにとって GID として生きることはどのような意味をもつか。やはり、母親との関係については相変わらず語られないが、2 人の関係はどうなっているのか。
2004.6 ソラ 第2回	改めてインタビューエントリーを行う。第1回目よりも少しリラックスした様子で、喫煙しながら思い出を掘り起こすように語られる。臨床心理学を学ぶ私に意見を求めることもしばしばみられ、筆者も積極的に応答しようとした。	ソラに語らせることで、逆に辛い思いをさせているのではないか。ソラはハルのことでのショックが大きそうだが、どうやら私は二人のコミュニケーションの橋渡しになっていそうだ。
2004.9 ハル 第6回	研究参加者というよりも、友人関係として会い、話をしているという雰囲気に近い。性的に突っ込んだ話をすんなりと聴けるようになる。	生活全般（仕事、パートナー、家族、生き方、治療）について満遍なく聴き取りができたのは、ハルと私の関係の変化によるものか。ハルが精神的にも安定しているように見受けられる。これまで語られなかった家族の話もよくされる。
2004.10 ソラ 第3回	これまでのインタビューで、一番長丁場になった回である。当事者の家族へと関心が移り始めており、インタビューの事前に手紙であらかじめ聞きたい内容について伝えていた。	現在のハルに対する見方やソラの生き方について深く知るために、ソラのライフストーリーについて聴かせてもらう。ハルの GID については、どこもなく吹っ切れを感じさせる話しぶりだ。
2004.11 ハル 第7回	ハルとの関係については、第6回と変わらない。	ソラについて肯定的な語りがなされるようになってきた。何があったのだろうか。
2005.6 ハル 第8回 (アキ同席)	ハルとの関係は、第6回と変わらないが、この回では、ハルは気分の沈んだ状態を筆者に「聞いてほしい」と断りをいれて語り始めた。自ら積極的に語り始めるのは初めてであり、これまでのインタビューとは様相が異なっていた。アキに関しては、以前ハルが筆者にアキを会わせようとして断固拒否された経緯があった。アキがインタビュー場面に同席するという報告は、筆者に驚きと同時に緊張をもたらしている。	ハルは、治療への足取りが鈍っている。家族を客観的にみる語りが多い。家族関係は良好のようだ。家族は、どのように関係を取り戻したのか。アキは、なぜ今回、快く筆者に会ってくれたのだろうか。アキからみた家族というものに気付かされる。ハルに対して今までどのような感情を抱いていたのだろうか。
2005.8 アキ 第1回	アキは筆者のインタビューを快諾してくれた。筆者の私生活にも興味があるようだった。	アキは、ハルとは全く異なるスタンスで家族に働きかけていたようだ。アキの話に頻出する父親は一体どのように家族にかかわり続けていたのだろうか。
2005.8 マサとの接触	ソラやハルを通して、また筆者からもハルの父親にインタビューのお願いをしたが、断られる。インタビューの代わりに、ハル、アキ、マサが外食をするのに連れ添うという形で会うことになった。	ハルやアキから語られた父親像からは想像できないほど穏やかな人である。現在、親子間の仲は良好のようだ。どのように関係が修復されたのだろうか。

リサーチクエスチョン2の分析手続き

分析データは、アキの語りデータである（ハルの第6回インタビューにアキが同席した際の語りを含む）。アキへの個別インタビューでは、『姉』が性別を移行しようとしていることについて感じていること・これまでの姉、家族との関係・家族について思うこと」を中心に、約2時間話し合った。アキの語りデータから、ハルの不登校及びTGに関する2大人生イベントに言及している語りを抜き出し、人生イベントに対する意味づけや経験の分析を行った。マサに関しては、インタビューの場で語らないという行為の選択について考察した。

羅生門の語りにおける研究者の視点と本論のスタンス

羅生門の語りの位置づけを巡っては、「ある出来事に対する多様な語り（視点、経験、意味づけ）が存在することは当然ではないか」という議論が考えられる。しかし、ここで重要なことは、多様な語りが個々に無関係でバラバラな語りとしてではなく、同じ1つの出来事に対する多様な語りとしてあらわれる点である。映画「羅生門」を例にすれば、「証言（視点）の著しい違いにもかかわらず、これらの証言（視点）が同じ一つの事件に対する異なる証言（視点）として定位される事実」（矢守，2007）を意味する。無論、定位するのは、研究者側の視点及び実践に他ならない（Bertaux, 2003/1997；Garfinkel, 1967；Geertz, 1987/1973；野口，2005a, 2005b；Riessman, 1993；桜井・小林，2005）。

本論の場合、研究者が家族と出会い、関わりを深める中で、研究者自身が家族との相互的な状況に参入していた。その一方で、家族を研究者の視点からみつめ、家族の羅生門的語りを分析、記述していった。このような家族との間合いが、分析や結果の信頼性、妥当性に与える影響は小さくない。いうなれば、本論もまた、家族との対話におけるナラティブ的言説であり、羅生門的語りの1つにすぎない（Bertaux, 2003/1997）。特に、本論のような縦断的インタビューの場合、インタビューの内容だけでなく、インタビューの体験それ自

体がナラティブの新たな要素となり、ナラティブを展開していくため、インタビュアーとインタビューーの「共同制作の産物」としての意味合いが強まるという（野口，2005b）。

そこで、ベルトー（Bertaux, 2003/1997）を参考にし、読者がインタビューの実践を確かなものとして理解できるよう、インタビューでの語りの産出の文脈を提示し、聴き手である研究者の問いや感情の道筋を示した（表2）。松嶋（2002）は、自らのフィールドワークを反省的に再検討し、研究者自身の立場を積極的に論文に組み込むことが現場への関わりを有用なものとし、研究の真実性を高めると述べている。研究者の視点や意味づけを明示することで、分析によって抽出された人生イベントそのものが、現場（本論では、TG当事者を抱える家族）に関わる姿勢を示唆すると同時に、「なぜそのイベントが多様な語りを定位する1つの基準となりえたのか」という問いへの説得力ある応答となる。研究者は、現場に積極的に働きかけ、常に何らかの方向性や視点を作り出し続ける一方で、自身に立ち現われる世界を振り返る必要がある。さらに、その世界を読者に提示するというスタンスは、読者もが家族と対話し、新たな羅生門的語りを生成できるよう試みるものである。

結果1 リサーチクエスチョン1に関して

人生イベントにおける病いの経験

まず、2大人生イベントである不登校イベントとTGイベントについて説明する。不登校イベントとは、ハルが不登校になった小学校入学直後から、その後約10年間にわたり、母子の人生の中核を占めている人生イベントである。不登校イベントからは、不登校以前、不登校開始、不登校継続(1)、不登校継続(2)、自殺未遂、深夜徘徊、精神科病棟への入院、バイト開始(ハル)・再転職(ソラ)の6つの人生イベントが羅生門的に構成された（図1）。図1のA（A⁺）～F（F⁻）は、ソラとハルによるそれぞれの人生イベントに対する意味づけである。6つの人生イ

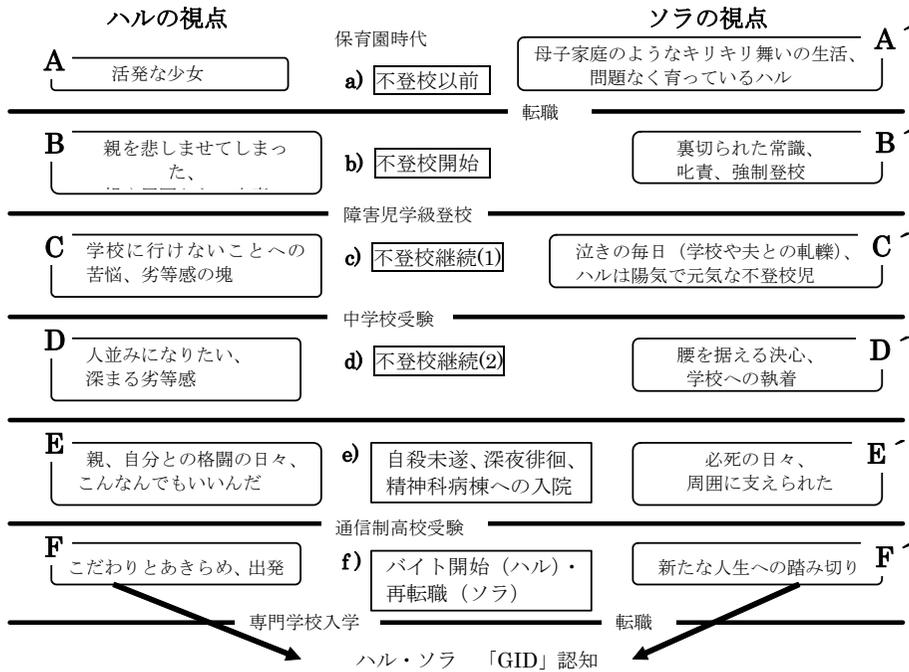


図 1 羅生門的語りから構成された不登校イベント

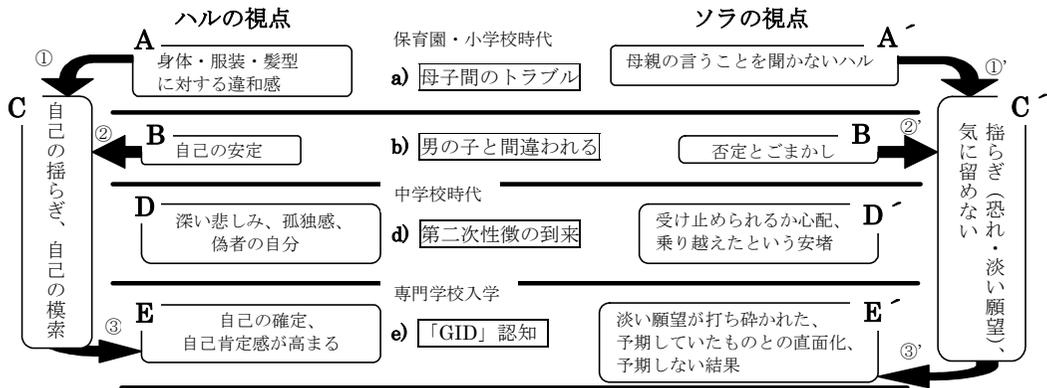


図 2 羅生門的語りから構成された TG イベント

イベントは、母子の行動や心理的な変容を起こす契機となっていた。

TG イベントは、不登校イベントとは異なる様相を呈する(図 2)。TG イベントからは、**母子間のトラブル**、**男の子と間違われる**、**第二性徴の到来**、

「GID」認知 の 4 つの人生イベントが羅生門的に構成された。

ハルは、20 歳時、自らを「GID 当事者」と認知するようになる(その後、ハルは自らを「GID」と表現しなくなるため、20 歳当時の「GID」認知については、

GID を「 」で括って表記した)。TG イベントは、ハルが「GID」認知し、他者にカミングアウトし始めてから、母子双方に TG イベントとして構成され始める。つまり、ハルが「GID」認知する以前は、TG にまつわる経験とは双方に認識されておらず、したがって、病いは TG イベントによるものという認識のもとで経験されていない。

ところが、ハルは「GID」認知後、それまで感じていた生き難さを GID という疾患に由来するものとして再認識し、他者に語り始める。ソラもまた、ハルの幼少期から継続するいくつものトラブルを「そういえば、(ハルとのトラブルは)性にまつわるものだった」と、過去を捉え直し始める。TG イベントという病いの経験は、現時点から過去に遡り、記憶の中で過去のイベントを模索し、再構成されるのである。

こうしてみると、ハルとソラが互いに経験した病いとは、TG イベントそのものにあるのではなく、目にみえる形で長期間引き続いた不登校イベントにあるといえる。しかし、不登校イベントが落ち着き、ハルが20歳を迎えた頃、ハルは「GID」認知する。その時点から、母子双方が過去の記憶に遡ることで TG イベントが構成され、病いの経験が立ち現われる。TG イベントは、顕在化した不登校イベントの裏に潜在しているかのようであり、ハルの「GID」認知を待って、病いの経験を顕在化させる。ハルとソラは、顕在的(不登校イベント)／潜在的(TG イベント)という、二重に絡み合った病いを経験しているのである。

ハルとソラが互いに経験した病い

1. 不登校イベントを通じた病いの経験

ここでは、不登校イベントに関する母子の羅生門的語りから構成された a) から f) の6つの人生イベントに対する母子の意味づけ、病いの経験について記述する(図1)。「 」は研究参加者の語りの引用であり、()は筆者が語りの内容を補足したものである。

a) **不登校以前**

A. 活発な少女——ハルは、保育園時代を振り返り、自分を男の子ともやり合う「活発な少女だった」という。しかし、この後に不登校が始まると「普通ではない自分」という意識を持ち始める。

A. 〘 母子家庭のようなキリキリ舞いの生活、問題なく育っているハル——ソラの生活は、仕事に子育てに奔走し、「いっつも戦争」のようであり、ソラが1人で「キリキリ舞い」になっている状況をみていた当時の保育園の先生が、「もうこのままだったら子どもがダメになっちゃう」と忠告するほどであった。父親も仕事が忙しく、育児参加が困難であった。ソラは、ハルに対して多少の育てにくさを感じつつも、「問題なく育っている」と思っていたという。妹のアキが誕生し、いよいよ仕事と子育ての両立が難しくなり、ソラは時間的拘束の少ない職場へやむなく転職する。

b) **不登校開始**

B. 親を悲しませてしまった、親や周囲からの叱責——ハルは、学校での勉強や友人関係には何らの問題もなかったが、「押しつぶされるような建物の威圧感」に対する恐怖から、小学校入学直後から不登校となる。ハルは、親や周囲から叱責を受けたが、それはハルが抱いていた「親を悲しませてしまった」という罪悪感を増大させるものであった。

B. 〘 裏切られた常識、叱責、強制登校——ハルが不登校を始めた当時、不登校は現在のようにありふれた現象ではなく、またソラ自身も「子どもってみんな元気で楽しく、学校に行くもんだって信じて疑わなかった」ため、予想外の出来事と受け止めた。突然の不登校に驚きを隠せなかったソラは、ハルを叱責し、無理やり学校に通わせたこともあるという。

c) **不登校継続(1)**

C. 学校に行けないことへの苦悩、劣等感の塊——身体が拒否反応を起こし、どうしても学校に通えなかったハルは、「要は人より劣っているっていう意識があって。それはやっぱり普通のことができないっていう、学校に行けないっていうのが、普通のことをしてないとか普通のことできないっていうので。その当時って、(学校に行けない原因は)特にしつけの問題とか、弱い人間だからとか、甘えだからとかがあったし、自分でも思っていたから。いる価値がないと思って」いたという。その頃苦悩していた自分は、「劣等感の塊だった」と語っている。

C. 〘 泣きの毎日(学校や夫との軋轢)、ハルは暢気で元気な不登校児——ソラは、当時のハルの行動から、ハルが「暢気」で「元気な登校拒否」をしていると思

っていた。元気な子がなぜ学校に行けないのか不思議でならず、なんとか学校に通わせようと試行錯誤する。「暢気な」ハルとは対照的に、ソラは学校から子育ての仕方を注意され、悔しくて「毎日が泣きの涙」だったという。また、子育ての方針を巡って、夫との喧嘩も絶えなかったという。ハルを暢気だと考えていたことについては、「ちょっと落とし穴があったんですよ。そうじゃなくてかなりいろんなこと、自分のこれからの人生とかいろんな事を含めて、かなり深刻に悩んでたんだなっていうのを（知った）」と反省を込めて、振り返っている。

d) **不登校継続 (2)**

D. 人並みにになりたい、深まる劣等感——「人並み」になることを切望するハルは、自由な校風である私立中学を受験し、入学する。しかし、そこでも入学式後から再び不登校に陥ってしまい、劣等感をさらに深める結果となった。不登校イベントにおいて、最も辛かった時期を中学時代と語るハルからは、当時、心に抱えていたものの大きさが窺い知れる。

D. 腰を据える決心、学校への執着——ハルが再び不登校に陥った状況を目の当たりにしたソラは、カウンセラーとの継続的な話し合いの末、ハルの不登校に腰を据える決心をしたと語る。しかし、胸のどこかで、学校復帰への執着は消えなかったという。ハルも、母親が強調する「私は変わった（もう、ハルを無理やり学校に通わせたりはしない）」という言葉に対して半信半疑だったと、当時を振り返っている。

e) **自殺未遂、深夜徘徊、精神科病棟への入院**

E. 親、自分との格闘の日々、こんなんでもいいんだ——中学2年のある時期を境に、約4ヶ月間、自殺未遂を伴った深夜の徘徊を続けたハルは、最終的に精神科病棟へ入院する。ハルは当時のことについて、「それはなかなかすさまじい闘いで、親、そして何より自分との格闘の日々であった」と語る。病院で同じような悩みを持つ子たちと出会い、「ああ、自分はこんなんでもいいんだなって徐々に思い始め」たという。

E. 必死の日々、周囲に支えられた——ソラは、このイベントを子育ての中で最も重大なイベントとして、「14歳の1年間」という言葉で表現し、当時の状況を「必死の日々だった」と、インタビュー中、深刻な面持ちで繰り返し語っている。一方で、「飛び降り自

殺っていうのが彼女の死に方なんですよ」、「家にはね、遺書ファイルというのがあるの」とあっけらかんと語る姿を時折みせ、我が子の生死に関わる危機的局面を乗り越えるなかで培ってきた母親としての強さが筆者には感じられた。

f) **バイト開始 (ハル)・再転職 (ソラ)**

F. こだわりとあきらめ、出発——病院退院後も、不登校のまま中学校を卒業したハルは、依然、「人並み」であり続けることにこだわっていた。周りの同級生から遅れをとらぬよう、ハルは通信制高校に入学したが、ハル自身が予期していたとおり、今回もまた登校は続かなかった。ハルはそこで、「いい加減、あきらめ」の境地に至り、高校を退学し、バイトを始めた。当時のハルの作文によれば、ハルは、バイト開始のイベントを新たな自分の「出発」と意味づけており、「自分だって1人で生きていけるかもしれない。そう思うと、今まであった劣等感みたいなものが揺らぎ、少し楽になった」と、当時書いた作文中で語っている。

F. 新たな人生への踏み切り——ハルがバイトを始めだすと、ソラは子育てに目処をつけ、希望していた専門職へと転職を遂げた。50歳を過ぎてからの転職について、ソラは「私はやっぱり弱い人間だから、自分が本当にやりたい仕事についていないとね、将来あなたのためにね、私は自分のやりたい仕事ができなかったって言いそうな自分が恐かったっていうかね。そういう風に言って（子どもを）追い詰めてはいけないっていう、そのためにはね、まあ無理をしてでもね、最後に、人生の最後の仕事は自分がやりたいと思う分野で仕事をしておきたいな」と語っている。

2. TGイベントを通じた病いの経験

次に、TG イベントに関する母子の羅生門的語りから構成された a) から d) の4つの人生イベントを取り上げ(図2)、それぞれのイベントに対する母子による意味づけ、病いの経験について記述する。

a) **母子間のトラブル**

A. 身体・服装・髪型に対する違和感——ハルは、物心ついた頃から、自らの女性の身体つきに違和感があったという。小学校の入学式以来、スカートをはいたことはなく、髪も伸ばしたことはないという。その後は不登校であったため、自分と他の生徒との間の意

識の違いを特に意識することはなかったが、身体の違和感は絶えなかったという。

A. 母親の言うことを聞かないハル——ソラは、ハルの幼少期について、「今思うと、性に関わることでずっとトラブルっていたのは確かよね」と確信を持って語っている。トラブルとは、「スカートをはくとかはかないとか」という服装の問題や、「髪をもう少し、女の子なんだから、耳の下まで伸ばしなさいって言うのに、あの子は刈上げを望む」といった髪型の問題、また、『ぼく』じゃなくて、『わたし』でしょ!」というハルの言葉遣い（一人称）の問題である。ハルは、これらの注意に耳を貸さず、1つ1つ「ムキになって」反抗し続けたという。特に、ハルが第二性徴を迎えてからは、この手の言い争いは一段と激しさを増したという。

b) 男の子と間違われる

B. 自己の安定——ハルは、幼少期から、周囲の人に男の子とよく間違われていたということを根拠に、「自分は本来は男の子だったんだ」という確信を強めていく。生物学的にも社会的にも、女性として生きていくことに生きづらさを感じていたハルにとって、他者から「男の子」という評価を受けることは、自己を安定させるものだった（湧井, 2006）。

B. 否定とごまかし——ソラは、ハルが男の子と間違われるたびに、「女の子ですよ」と訂正していたが、ある時期からは「お兄ちゃん?」と聞かれても、「そうよ」と言って、「ごまかしてきた」という。妹のアキが初めて書いた作文には、ハルが近所の人に男の子に間違われ、ソラが恥ずかしそうに反応する場面について書かれていたという（「(近所の人が) いつもお母さんに『あの人(ハル), お兄ちゃん?』でいつも聞くと。で、いつもそれをお母さんは聞いて、ちょっと恥ずかしそうに、曖昧に答えると。で、お母さんがかわいそうってね、ははは)）。

母子間のトラブルや男の子と間違われるという人生イベントは、母子に、C. 自己の揺らぎ、自己の模索/C. 揺らぎ(恐れ・淡い願望)、気に留めないという状態をもたらす契機となり(図2の矢印①, ②)、ハルが「GID」認知するまで継続する。ハルが「GID」認知すると、C/C'の揺らぎは、E. 自己の確定、自己肯定感が高まる/E. 淡い願望が打ち砕か

れた、予期していたものとの直面化、予期しない結果という意味づけがなされ、母子双方の揺らぎは終局する(図2の矢印③)。

ハルは、男の子と間違われることで自己の安定を保ちながらも、女性としての生物学的な発達が進むにつれ、自分が他の男の子たちと全く同じ存在ではないことに気付きや戸惑いを感じ始める。また、他者から自分の身体を揶揄されることによる傷つきから、次第にC. 自己の揺らぎが生まれていった。自己の揺らぎは、持続する身体の違和感と相まって、「自分が本当は何者なのか」を模索し続ける原動力となっていた。一方、ソラは、母子間のトラブルから、ハルの性の問題に対する「恐れ」(「いつかこういうことが問題になるかな」と「淡い願望」(「ハルが20歳過ぎてね、一定の年齢になればね、ま、そこそこ女性っぽくはならなくても、まああの(女性に)変わっていくだろうな)との狭間を往還していた。インタビューでは、揺らぎそのものを打ち消すかのような「別段気にも留めなかった」という語りが挿入されており、語りの内容面だけでなく、語る行為そのものに揺らぎが生じていることが推測された。

d) 第二性徴の到来

D. 深い悲しみ、孤独感、偽者の自分——第二性徴の到来は、「自分が男であるかもしれない」というハルの一筋の可能性を完全に否定し、ハルに深い悲しみと孤独をもたらした(湧井, 2006)。ハルは第二性徴以降も、「男として扱われたい」「男になりたい」という願望を抱きつづけていた。また、この頃、同性(女性)に恋愛感情を持つ自分を「同性愛者」と認識し、劣等感を一層肥大化させている。ハルにとって、「同性愛者」である自分は、差別や侮蔑の対象でしかなく、自分が人間として偽者になってしまったかのような空虚感に苛まれていた。

D. 受け止められるか心配、乗り越えたという安堵——ソラは、長引く不登校や継続的な母子間のトラブルへの憂慮から、ハルが第二性徴を「ちゃんと受け止められるのかどうか心配」していた。ハルは初潮を迎えた時、「よかった、あたしには(生理が)来ないのかと思って心配してた」と、ソラに軽く伝えたという。このことから、ソラはハルが「案外、冷静に」初潮を受け止めたと思い、安堵している。

e) 「GID」認知

E. 自己の確定、自己肯定感が高まる——ハルは、ある TG 当事者の手記と自分の人生とを照らし合わせ、これまでの苦悩が、「GID」という障害によって全て説明できることに気付いた（荘島、2006）。ハルは、GIDであることを「スムーズに」受け入れ、自己肯定感を高めている。「GID」当事者として生きていくことが「一番楽に生きられる道」だとし、将来、身体を男性に変えることを決意し、他者にカミングアウトしはじめる。

E. 淡い願望が打ち砕かれた、予期していたものとの直面化、予期しない結果——予期に関しては、「していた／していない」と語りに揺らぎがみられるが、「いつかは変わるだろう（普通になる）」という淡い願望を持ち続けてきたソラにとって、「そのまんまになっちゃった（普通の女性に戻らなかった）」ハルの存在は、ソラを「もう変わることのない現実」に直面させるものであった。

考察1 リサーチクエスチョン1に関して

(1) 母子の病いの経験の悪循環構造

結果1では、複数の人生イベントに付与された母子双方の立場からの意味づけから、病いが多層的な状況として捉え直された。考察1(1)では、母子それぞれの病いの経験が悪循環している構造をみていく。

ハルは「GID」認知以前、2 大人生イベントを通じて、自己の存在への懐疑や葛藤を繰り返してきた。不登校、身体への違和感、第二性徴の到来といったイベントは、いずれもが GID という疾患（身体違和感）や人の生物学的発達（第二性徴）、社会的発達（学校制度）に関わっているため、ハルにとって回避不能なイベントである。また、身体的・心理的違和感、自己の不一致感（「自分は偽者」）を少しでも和らげるために、自分が男の子らしく見えるように努めるハルの行為は、母子間のトラブルや不安定な自己認識を引き起こしていた。ハルが生きやすい道を選択することは、他者との軋轢やそれに伴う葛藤を必然的に生み出

してしまうことから、ハルは病いの悪循環構造に陥っているといえる。

ソラもまた、不登校イベントを通じて様々な葛藤の中にいた。思うようにいかない子育て（不登校や母子間のトラブル）、やむを得ない転職、子育てを巡る夫との喧嘩、学校や保育園との軋轢や衝突といった葛藤の根源はハルにあったため、それらを断ち切るには、叱責してでもハルを学校に登校させるほかなかったと思われる。さらにいえば、ソラに内在している社会的規範（子どもは元気に学校には行くべき、女性は女性らしい格好をすべきといった規範）が、ソラを逃げ場のない窮地へと追い込み、ハルを叱責する行為へ向かわせたともいえる。実際、ソラは、「私のその当時の社会の不登校というのはね、そのままだと生きていけないみたいだね、そんなドグマに汚染されていたので（笑）。まあ、今考えるとね、学校行かないくらい大したことなかったんだけど」と、当時の自分を表現し、「もう散々学校からもう、いろんな方から言われて、どこかやっぱり自分の苦しさを子どもにぶつけた部分もあったから、だからやっぱり不登校していろいろね、本人は苦しかっただろうと思うんだけど、やっぱり行かないことを責めたりね、そういう関わり方もしたなっていうのは、すごく反省するところなんですけどね」と振り返っている。

性別を移行しようとするハルの生き様は、ソラが当然と思っていた常識や社会規範を内側から揺さぶり、ハルの受容を巡ってソラに大きな葛藤を強いている。ハルが病いの悪循環に陥っているのと同様に、ソラもまた病いの悪循環構造の只中におり、これらは、母子間において相互に悪循環する病いの経験の構造を照射している。

(2) 病いの経験に対する説明物語の変化

考察1(2)では、ハルの「GID」認知後、TG イベントが母子間に構成され始めた時点における、母子それぞれの人生イベントに対する説明物語の変化について述べる。TG イベントが母子に顕在化したとき、ハルとソラは、いかに TG イベントを物語るのだろうか。

図3は、母子の人生イベントに対する説明物語を、「GID」認知前後に分けて提示したものである。ソラ

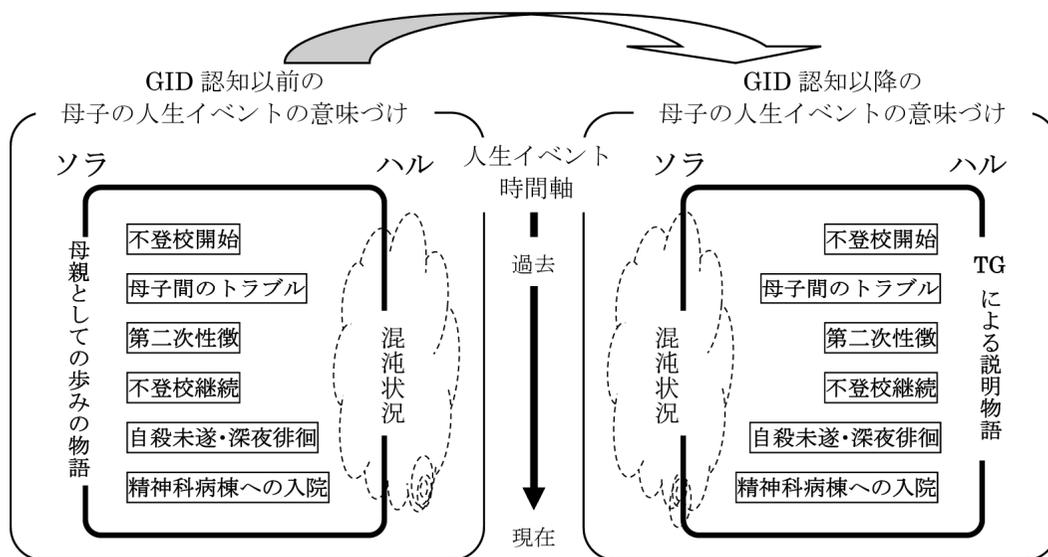


図3 「GID」認知前後の母子の人生イベントの説明物語の変化

は、ハルの「GID」認知以前（図3左側）は、諸々の人生イベントに対し、母親としての歩みの物語という説明物語によって意味づけ、語っていた。不登校イベントにおいて、他者や社会との軋轢という形で生じていたソラの病いの経験は、母親としての歩みの物語によって、子育てのつまずきとして認識されている。例えば、「ハルは小さいときから、ある意味ではね、ちょっと育てにくい子でしたね。それは、私が慣れてない、初めての親だったってということもあるし」という語りや、「今思うと、駄々をこねるといことで（ハルは）自己主張してたんでしょね。そのサインが私には見えなくて。もう、カッカカッカして対応してたから」という語り、「本当は、（自分が）疲れてたりなんかしてて、（ハルからの）もっと違ったサインだったんだろうって今だったら思えるのね。でもそのときは言葉どおりで。あの、私も（言葉通りにハルのことを）受け止めてたからね。あのー、2人目（妹）はうまく、うまくというか、上（ハル）で、へへへ、懲りてるから（笑）」というこれらの語りは、ハルが第1子ということもあって、親の対応がうまくできていなかったことを説明する語りの例である。子育てのつまずきという捉え方は、否定的な意味を含んではいるが、むしろ母親としての自分を成長させるものという肯定

的意味合いを持つ。例えば、「そういう意味ではいい勉強を、ハルから（させてもらった）」という子育てについての語りや、筆者の「毎日が学びの場ですね」という投げかけに、「あ、そうですね、鍛えられますね」と答えていることから、ソラが子育てのつまずきを肯定的に捉えようとしていることがうかがえる。子育てに目処をたて、50歳を過ぎてからの転職を決行したソラは、母親として歩んできた親の物語に区切りを打とうとしていたとも考えられる。

一方、ハルは「GID」認知以前には、自分の身に生じてきた数々の人生イベントを説明する物語を持っておらず、不安定なまま混沌としていた。ソラが、母子間における葛藤を、母親としての歩みという説明物語によって肯定的意味を生成していたのに対し、ハルは不登校イベント（不登校以前、バイト開始の時期を除く）により、劣等感が増大する経験や自己への否定的意味づけしかなされていなかった。しかし、この状況は、ハルの「GID」認知によって一変する（図3右側）。ハルは、「GID」という自己の説明物語を得て、混沌としていたそれまでの人生を再構成し、他者に説明し始める。過去から現在、そして「いずれ男になる」という未来への道筋を「自分が一番楽に生きられる道」として、ハルは人生の「スタート地点」に立つのであ

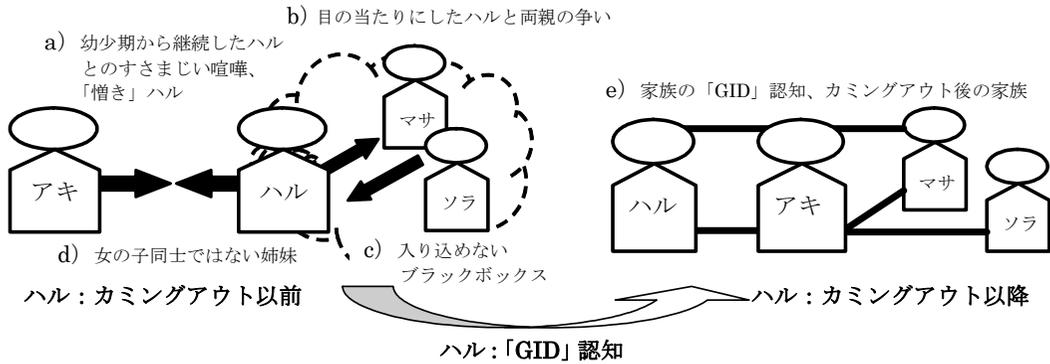


図4 アキからみた家族及び家族への働きかけ：カミングアウト以前・以降

注 カミングアウト以前：雲形の点線は、ハルと両親の心の混沌状態及びアキからみた家族のブラックボックスの状態を表し、人物間の黒矢印は関係の衝突を表す（ハルとアキの間・ハルと両親の間）。カミングアウト以降：人物同士をつないでいる実線は、関係のつながりを表す。

る。一方、ハルからカミングアウトを受けたソラは、母親としての歩みという説明物語に、ハルが実は「GID」であったという新たな物語を組み込めず、母親としての歩みの物語は、突如解体の危機に直面する。「いずれ男になる」というハルのカミングアウトは、未来に射程を置いた説明物語であるため、ソラにとっては、過去から現在、そして未来まで引き続く母親—娘関係の持続という極めて常識的な予測経路からの逸脱、常識的枠組みの崩壊を意味し、ソラは戸惑いを隠せない。母親の歩みの物語に目処をつけ、転職し、新たに第2の人生を自分のために歩み始めようとしていたソラは、ハルからのカミングアウトによって、人生の物語の解体を迫られることになる。

結果2 リサーチクエスト2に関して

次に、妹のアキと父親のマサの羅生門的語りから、人生イベントに関する病いの経験を取り上げる。リサーチクエスト2の分析手続きに従って分析を行った結果、図4が得られた。図のa)～e)は、アキの病いの経験に関して抽出されたテーマであり、それぞれa) 幼少期から継続したハルとのすさまじい喧嘩、「憎き」ハル、b) 目の当たりにしたハルと両親の争

い、c) 入り込めないブラックボックス、d) 女の子同士ではない姉妹、e) 家族の「GID」認知、カミングアウト後の家族、の5つである。

図中、雲形の点線は混沌状態を表し、人物間の矢印は関係の衝突を、実線は関係のつながりを表す。マサについては、インタビューを断り、家族について語らないという選択を取った行為について考察する。

妹のアキの病いの経験

アキは、家族の中で最初にハルからカミングアウトを受けた。アキはカミングアウトされた時期を正確に覚えていないというが、『あ、そうなんだ、へえみたいに』結構軽く流し、動揺は全くなかったという。逆に、「この人は男なんだ」と納得できる出来事であった。アキは、「学校の記憶のほうが楽しいこととかいっぱいあったから、そっちの方が覚えてる」といい、家族内で起きたイベントの記憶の薄さを繰り返し語っている。以下、アキの家族に関する語りから、アキの病いの経験に迫る。

a) 幼少期から継続したハルとのすさまじい喧嘩、「憎き」ハル——アキはインタビュー語り出し早々に、過去に繰り返されたハルとの喧嘩について語り始めた。ハルは「キレやすく、鬼のように怖いやつ」で、「一

番気を遣う存在」だったという。顔を合わせれば喧嘩をし、当時は口も利きたくなかったと回想する。アキとハルがインタビューに同席した場面では、過去に受けたいやがらせを巡って、まくし立てるように言い合いを始め、笑いが生じている。「ハル以外は何も恐くない」「ほんとに鍛えられた」とアキが真剣に筆者に訴えるほど、すさまじいものだったようだ。

ハルが深夜徘徊をしていた折、アキは一度だけハルから自殺の予告電話を受けたことがあるという。ソラの気が動転したのとは逆に、アキには「死んで困る」という感情は湧かず、「いい人ぶって、(自殺を)止め」と語っている。ハルの入院も、記憶にあまりないという。

b) 目の当たりにしたハルと両親の争い——ハルは、日々、両親とも争いを繰り返していた。アキは、両親がハルに殴られる姿を毎日のようにみており、それを親に対する「いじめ」だと思っていた。「お母さんが殴られて横になっているのとかみるのいやじゃないですか？」と筆者に問いかける場面もあった。ハルと両親の争いに收拾がつかなくなると、母親はアキに近所の人を呼ぶように頼み、「ハルが暴れてるんで来てください」といつて来てもらうこともあったという。ハルがお酒に酔った父親を羽交い絞めにし、窒息寸前の父をみて、「(お父さん)死ぬ死ぬ！」と思い、寝ている父親の呼吸を確認しにいったことを、アキは昨日のことのように語っている。アキは、親を「いじめ」るハルを「いつか殴ってやる」と心に決め、中学から身体を鍛え始める。

c) 入り込めないブラックボックス——家庭の中で、「お父さんとお母さんは、ハルのことでいっぱいだった」とアキはいう。ハルが学校へ行かないことに対して、「なんで、ハルは毎朝学校に行くのを嫌がってるんだろう、なんでお母さんは毎朝ハルのランドセルを引きずってるんだろう」と疑問をぶついても、ソラからは「ハルは大変だから」としか返事がない。アキは当時の家族の状況を、「何にもハルの情報がないまま、なんかおかしい空間」と表現している。この点についてソラは、「ハルが不登校だったっていうことで、私はやっぱり下の子(アキ)にある時期はね、犠牲にしたなっていうのはあるんですよ。やむなくハルに関わらなきゃいけないかったりして」と、申し訳な

さそうに語っている。

家族のブラックボックス的環境が継続するうちに、アキは「この家には、居場所がないな」と感じるようになっていった。両親とハルに「極力触れたくない」し、「痛い痛い痛いって」思っていたから、「(家族の中で)見つからないように、あたしいないように」していたと語る。その一方で、アキは争いの絶えない家族を、「どうしたら家族が仲良くなるんだろう」と考えて試行錯誤してきたという。しかし、どうやっても家族が1つにまとまりそうにないとあきらめがついてからは、「家族にもう引きずり込まないで、もう入れて欲しくなかった、ほんとに」と感じていたという。1人暮らしを始め、「あの家族から離れて、1人で勝手に楽になった」アキは、「なんか変な家族だったなあ」と振り返っている。

d) 女の子同士ではない姉妹——ハルの男性的な外見や肉体的な強さから、アキは幼少期からハルを「男としてみていた」。「私はほんとに、(男女)どちらかはっきりしたほうが欲しくて。お姉ちゃんだったらお姉ちゃん、お兄ちゃんだったらお兄ちゃんって言いたかったけど、お姉ちゃんってハルに声をかけたら、(ハルの外見との不一致から)誰からも振り向かれる存在だったから、(周囲の反応が)『え?これがお姉ちゃんなの?』みたいな感じだったから」と語るアキは、周囲から「アキのお姉ちゃんは男みたいだねえ」と言われても、「あ、そうだねえ」としか返す言葉がなかったという。また、ハルからは「ハルと呼べ(『お姉ちゃん』ではなく名前と呼べ)」と脅される一方で、母親からは「(ハルと名前と呼ぶのではなく)お姉ちゃんと呼べ」と言われ、板ばさみ状態であった。

アキが小さい頃から気になっていたことは、ハルが男女のどちらを好きになるかということであった。小学校の時、アキは、ハルに1度「男が好きなの?女が好きなの?」と問い詰めたことがあるという。ハルとの問答の末、ハルが女性に好意を持つことが分かったとき、「とりあえず、この人レズなんだ」と認識して、姉妹という同性同士の関係に距離が生まれたという。「女の子同士だったらベタベタできるけど、やっぱりそれはちょっと嫌だなとか。裸を見せたくない(中略)、お父さんと同じように(父親に裸を見せるのが嫌というのと同じように)、ちょっと恥ずかしい」、

「今は平気だけど、ちょっと気持ち悪くなって感覚」が、幼心に芽生えたと語る。ハルからカミングアウトを受け、ハルが「GID」当事者であることが分かった時は、「全然なんも気にしない！なんか気付いたら、だってそんな感じの人じゃないですか？男みたいだったし、なんかじゃあ、男なんだみたいなの」というように、すんなりと納得している。

e) 家族の「GID」認知、カミングアウト後の家族——ハルは「GID」認知後、家族に対して、自分が「GID」当事者であり、今後手術を受け、男として生きていくことを表明した。ハルに対する家族の反応やその後の関係は、個々の関係性によって多様であった。アキにとっては、「大したことではなかった、全然！」という出来事であり、むしろ「ああ丸くなったなあ。成長したなあってちょっとうれしい。彼女ができてよかったなあ。(中略) 落ち着いたんだな、ちょっと」と思えるイベントとしてカミングアウトが認知されている。カミングアウト以降、ハルはアキに暴力を全く振るわなくなり、逆に「少し、理屈っぽくなった」が、それはアキにとっては好ましい出来事以外の何ものでもなかった。

アキは、家族の中で誰よりもハルのカミングアウトにショックを受けたのは母親だという。アキは、「(ハルが TG 当事者であることは) 他の人に言っちゃだめよ、そんなこと絶対言っちゃだめよ」というソラからの念押しに違和感を抱いている。アキと父親の 마사 は、「ハルはそのほうが (TG 当事者として生きていくほうが) 自然っていうなら、そのことが自然っていうことだから別に敢えて女らしくとか男らしくとか煩わしいからいいと思うのに、お母さんは頑なにちょっとハルは違うんだっていう風に思っている気がして (中略) もうその話題には触れたくないと思っていて」、家族間で意見が割れているという。ハルについての話し合いがない現状をみて、「父親も母親も、1 人の人間だから、どんな過去を背負ってきたのかとか、ハルとかも。だからなんかすごい聞きたいのに、なかなか話さない。(中略) 掘り下げていかないと、なんか結果的にはうわべだけになっちゃうから嫌だなあと思う」と残念そうに語っている。

考察 2 リサーチクエスチョン 2 に関して

(1) カミングアウト前後での家族に対するアキの関与の変化

考察では、TG 当事者の妹の立場から家族に関わり続けたアキの経験について、家族に対するアキの周辺の関与の必然性と、それによって生じたアキの病いの経験という 2 つの観点から理解を深める。

図 4 に示したように、ハルの「GID」認知とカミングアウト前後で、家族におけるアキの位置づけが変化している。図 4 左側 (カミングアウト以前のアキからみた家族と家族への働きかけ) では、アキは家族の輪に入れず、家族に対して周辺的に位置づけられる。幼いアキにとっての家族は、何が起きているのか分からないブラックボックス的空間であり、また、鬼のように怖いハルから自分や両親までもが殴られる場であった。アキが語ったように、家族の中で「見つからないように、あたしいないように」していれば、両親は「大変なハル」により一層手をかけることができ、かつ、自分も殴られないで済む。つまり、アキの家族に対する周辺の関与は、アキが家族に居続けるための術であり、両親がハルに手一杯でありつづけられるために必要な関与のあり方だったといえる。しかし、そのような周辺の関与を持続させることで、家族の状況は一層ブラックボックスの闇を増していく。家族で起きたイベントについて記憶の欠落は、アキの周辺の関与によるものともいえるかもしれない。

また、ハルからの「レズ」であるという告白は、姉妹の間に「ちょっと嫌だな」という距離を生んでいる。アキとハルは、「レズであること」「レズである姉を持つこと」について親には告知しておらず、個別に問題を抱えている。このとき、姉妹の病いの経験は家族をつなぐものではなく、家族の関係性を分断する方向に機能している。

図 4 右側は、カミングアウト以後のアキからみた家族の関係性を示している。ハルが「GID」であることを家族にカミングアウトし、実家を出ると、それまで

家族の病いの経験の中心軸となっていたハルとソラの関係が希薄になっていく。実際に、ハルとソラの関係は、ソラによれば「近頃はめったに会わない」「挨拶する程度」の関係性へと変わっていく。アキはカミングアウトに戸惑う母親とハルを媒介する存在として、家族の中心に参入していく。ハルとソラが「GID」について一切触れることなく、沈黙した関係を続ける傍らで、アキは、ソラがハルに直接聞くことのできない疑問（例えば、ハルとパートナーの交際について）や、ハルの日常生活での苦勞に関するソラの不安を共有する相手となり、間接的にハルとソラの間をつなぐ役割を担い始める。

アキの病いの経験とは、カミングアウト以前、「大変なハル」がブラックボックスの中に隠蔽され、病いの状況そのものが見えないことにあった。カミングアウト以降、ハルの病いの経験が露わになると、家族のブラックボックス的構造は消失し、開かれた病いは、アキを家族の中心部分へと引き戻し、逆に互いに語らずに関係性が希薄になっていく家族間をつなぐ媒介者となる。開かれた病いは、それまで自分自身の存在を家族に「みえないように」していたアキを、家族の中で文字通りみえる形で存在させ、家族に中心的に関与することを可能にしている。

カミングアウト以降、ハルとアキのきょうだい関係（ハルは男であると宣言しているため、姉妹ではなく「きょうだい」とする）にも修復がみられる。アキは、鬼のようなハルの内面に、「多分、周りにはいい人でなくてはいけないみたいなのがあって」、「今思えば（数々の争いごと）しょうがないのかな」と、ハルに寄り添って理解している。

(2) マサの語らないという行為の選択

筆者は、ハルやアキやソラから「父親にインタビューは難しいかも」、「シャイだから」、「お酒が入れば話してくれるかも！」とアドバイスをもらいながら、何度かマサへのアプローチを試みたが、インタビューは実現しなかった。なぜ、マサは語るという行為を選択しなかったのだろうか。その可能性を考えることは、マサの家族における経験を考える手がかりになると思われる。なぜなら、語らないというマサの選択は家族

の歩みの中で繰り返されてきた行為のように思われるからである。

ソラは、夫婦の子育てや TG に関する語りの中で、マサについて度々言及しているが、その多くは、マサとの考え方の食い違いについての語りである。ハルの不登校を巡る夫婦間の教育論の食い違いや、ハルが TG として生きていくことに対する考え方の違いから、夫婦の間では喧嘩が途絶えず、ソラは精神的「きつさ」を感じていた。ソラ、ハル、アキの語りから推測すると、マサの育て方や信念は「何もしないこと」、「野生児のような育て方」である。マサにとっては、ハルの不登校や「GID」当事者として生きていくことは、「全然気にならないこと」であったのだろう。ソラはそのようなマサの教育態度について、「要するに関心がないのか、考えないのか、見捨ててるのか、よく区分がつかないですけど」と苦笑する。ソラにとってみれば、家族の状況に病いを感じず、動かないマサの存在もが、病いの経験となっていたと思われる。

しかし、一方でソラは、「ハルが精神病院に入院していた頃、2時間かかる送り迎えを厭わずにやっていた」、「ハルがバイトを始め出した頃、お弁当が必要だというハルに自分が4時に起床して毎日お弁当を作り続けた」、「ハルの病院（TGに関連する治療）に何の苦もなく付き添う」というマサの別の側面も語っていた。ソラは、普通であれば抵抗を感じてもおかしくない行為を黙ってやってのけるマサに感心している。

ハルとアキの語りでは、「テレビ壊した、あの人！」「包丁でコンセントぶちぎった！」という常軌を逸したマサの行動が面白おかしく語られる。しかし、アキは「意外と父親はいろいろ考えてて、でも、ほんとに口に出さないし、態度に出さない人だなんて最近思った」とも語り、マサの語らない行為を評価する。

語りを伴わぬこれらのマサの行動は、それ自体が家族の関係の中で生じる病いに抗う1つの手段だったのかもしれない。ケアや援助という行為においては、ナラティブが重要な役割を果たす（野口、2002）と考えられているが、語るという手段をとらない人たちの存在やその選択のあり方についても深く考慮する必要があるだろう。

総合考察と課題

本論では、1名のTG当事者とその家族にインタビューを行い、当事者と家族の病いの経験に羅生門的にアプローチし、これまで個に内在化していた病いが、実は個を取り巻く関係性や相互行為を通じて構成されていることを明らかにした。TG当事者を抱える親は、他の性的少数者⁹⁾の子を持つ親よりも心理的適応が困難といわれるが(Wren, 1999)、TG当事者を抱える家族の場合、病いの経験の中心を誰もが把握できぬままに巻き込まれ、病いの経験が再生産されつづけるような家族の関係性や相互行為に特徴があるといえるかもしれない。

考察に進む前に、対象とした家族がTG当事者を抱える家族として典型例かどうかという問題について考えたい。本論の場合、家族の典型例を見つけるのは二重の意味で困難といえる。1点目は、現時点において当事者を抱える家族の典型例が指し示されていない点であり、2点目は、仮に典型家族が存在した場合も、病いの経験の状況を生み出す関係性は個々に様々で独自のものと考えられる点である。家族の中の一員が、幼少期より性別違和感を持ち、不登校、自殺未遂を繰り返した果てに自らを「GID」認知するという経路については、これまでのGID研究からある程度の典型性は担保可能だが、本論では、そもそも個人の典型事例には重きを置いていない。あくまで、当事者と家族という羅生門的な視点の行き交いの中で生み出された状況や経験のありうる形態を記述することに本論の意義はある。この視点は、病いの経験に対する認識を転換する重大な戦略であり、かつ臨床実践的な意義を有している。

従来の病いの研究は、インサイダーパースペクティブ(Conrad, 1987; 経験や主観的世界といった人の内面を模索しようとする視点)から、病いを持つ当事者個人の「リアリティ」を掘り取ってきた(荘島, 2006)。例えば、湧井(2006)は、当事者のハルの自己物語(self narrative)を分析し、そこから意味や経験、心理的な構造を抽出するというインサイダーパー

スペクティブに立った研究をしている。この手法は、病む者やマイノリティと呼ばれる人たちの経験や生き様を指し示す一方で、病いの経験や構造を語る自己の内部に収束させてしまう。果たして、病いの経験という「リアリティ」は、個人の内部に属し、誰かによって発見されるようなものなのだろうか。本論では、その問いかけに答えるための戦略として、「互いに経験される病い」という概念に拠った。しかし、だからといって、病いはどこかに拡散して消失してしまったのでも、単純に相対化されてしまうわけではなく、関与する者それぞれに病いの経験をもたらしている。そして、語る者それぞれを病いの経験の主軸に置き、様々な形の声として発せられる(マサのように、語られない声というヴァージョンもある)。バフチン(Bakhtin, 1995)の**ことば**を借りれば、「ここではまさに、それぞれの世界を持った複数の対等な意識が、各自の独自性を保ったまま、何らかの事件というまとまりの中に織り込まれてゆくのである」(p.15)。このように、家族成員らの羅生門的語りは、ずれを孕んだ家族のポリフォニー(Bakhtin, 1974, 1979)を顕わにしている。ポリフォニーとは、「多声法・多声性」(伊東, 2003)と訳され、「それぞれに独立して溶け合うことのない声と意識たちの多数性」(Bakhtin, 1974, p.13)と、その対話性を包含した概念である。

しかし、研究者が家族の多様な視点や語り、家族の外側に立って鳥瞰し、そのポリフォニーを描くことができる考えるのは誤りである。逆に、研究者による解釈が家族の病いを再生産し、病いを権威付ける可能性があることに自覚的でなければならない。本論では、語りの場が産出された文脈(研究者の視点や意味づけ)を提示し、読者の解釈可能性を拡張し、権威付けのリスクを回避する試みを行った。家族間の対話、家族と筆者の対話、家族と筆者と読者の対話へと対話の輪が広がる中で、新たな解釈、新たな選択、新たな関わりが生まれることを期待したい。

最後に、臨床実践的な観点から、家族の病いの経験に着目する意義について述べる。病いの概念(Kleinman, 1996/1988)を援用することで、個を取り巻く関係性や相互行為からTG当事者を抱える家族の構造を明らかにし、さらに構造に介入する手立てを見出すことが可能となる。加藤(1976)は、事例性

(caseness: 家族などの共同体内での種々の問題の発生状況のこと) という概念を精神医学に導入し, 疾病をなくす視点よりも状況の中の問題性がみられなくなる(事例性の消失) ことを重視し, 精神病理学に根をもつ人間知・人間学の構築に力を注いだ。加藤(1976)の事例性及び疾病概念は, クラインマンの疾患及び病いの概念に意味的に対応する。本論では触れなかったが, ハルの事例では, 本来 GID という疾患に由来するとされる性別違和感でさえもが, 他者との関係性のあり方によって, その感じ方に変化が生じていた。ハルの事例は, 疾患と病い(加藤の用語では疾病と事例性)が相互に関連することを示すモデルケースでもある。まだ着手され始めたばかりの当事者と家族の経験に関するさらなる研究を行うにあたって, 本論で行った探索的研究を第一歩とし, 今後は事例数を増やして検討を深めたい。

注

- 1) 性同一性障害と診断された者の全てが性別適合手術を行うとは限らない。身体的な性別は変更せず, 社会的な性別を変更して生活することで満足する者や, 異性の服装を身につけることで性別の不一致を解消する者もいる。
- 2) TG 当事者であるハルの心理的世界については, 湧井(2006)に詳しい報告がある。
- 3) 「羅生門」という用語は, 芥川龍之介の「藪の中」を原作とした「羅生門」という映画に由来する。1人の男の死を巡って3人の人間による証言の食い違いが発生するというストーリーから, 1つの出来事を巡って相容れない知覚, 物語が存在することを「羅生門」と言い表すようになった(佐藤, 2002)。
- 4) 録音された語りから逐語記録を作成した。逐語記録の内容をインタビュアーに確認してもらった後, 分析データとして用いた。
- 5) インターセックス, トランスジェンダー, ゲイ, レズビアン, バイセクシュアルなど, 正常, 典型的, 規範的とされる性のあり方から逸脱する, 全体からみれば少数にあたる人たちの総称。

引用文献

バフチン, M. M. (1974). ドストエフスキイ論——創作方法の諸問題 第2版(新谷敬三郎, 訳). 東京: 冬樹

社.

バフチン, M. M. (1979). 小説の言葉 ミハイル・バフチン著作集5(伊東一郎, 訳). 東京: 新時代社.

バフチン, M. M. (1995). ドストエフスキイの詩学(望月哲男・鈴木淳一, 訳). 東京: 筑摩書房(ちくま学芸文庫).

ベッカー, H. S. (1993). アウトサイダーズ——ラベリング理論とはなにか 新装版(村上直之, 訳). 東京: 新泉社. (Becker, H. S. (1963). *Outsiders: Studies in the sociology of deviance*. London: Glencoe: Illinois: Free Press of Glencoe.)

ベルトー, D. (2003). ライフストーリー——エスノ社会学的パースペクティブ(小林多寿子, 訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Bertaux, D. (1997). *Les récits de vie: Perspective ethnologique*. Paris: Editions Nathan.)

カリフィア, P. (2005). セックス・チェンジズ——トランスジェンダーの政治学(石倉由・吉池祥子・レズビアン小説翻訳ワークショップ, 訳). 東京: 作品社. (Califia, P. (1997). *Sex changes: Transgender politics, 2nd edition*. Seattle: Wales Literary Agency.)

Conrad, P. (1987). The experience of illness: Recent and new directions. *Research in the Sociology of Health Care*, 6, 1-31.

Frank, A. W. (1993). The rhetoric of self change: Illness experience as narrative. *Sociological Quarterly*, 34(1), 39-52.

Frank, A. W. (1995). *The wounded storyteller: Body illness, and ethics*. Chicago: The University of Chicago Press.

福井敏・矢野里佳・西村良二. (2002). 性同一性障害(G.I.D)にみる依存性について. 福岡大学医学紀要, 29, 29-36.

Garfinkel, H. (1967). Passing and the achievement of sex status in an "intersexed" person part 1. *Studies in ethnomethodology* (pp.116-185). New Jersey: Prentice-Hall.

ギアーツ, C. (1987). 文化の解釈学 1・2(吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘充・板橋作美, 訳). 東京: 岩波書店(岩波現代選書). (Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures: Selected essays*. New York: Basic Books.)

ゴッフマン, E. (2001). スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ 改訂版(石黒毅, 訳). 東京: せりか書房. (Goffman, E. (1963). *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*. New Jersey: Prentice-Hall.)

伊東一郎. (2003). ポリフォニー・多声性・異種混淆. 文化人類学研究, 4, 2-18.

加藤正明. (1976). 疫学的精神医学——事例になるということ. 加藤正明(著), 社会と精神病理 (pp.134-138).

- 東京：弘文堂。
- クラインマン, A. (1996). 病いの語り——慢性の病いをめぐる臨床人類学 (江口重幸・五木田紳・上野豪志, 訳). 東京：誠信書房. (Kleinman, A. (1988). *The illness narratives: Suffering, healing and the human condition*. New York: Basic Books.)
- 小林多寿子. (1994). 「経験の物語」と「複合的自叙伝」——ライフヒストリーの重ね合わせをめぐって. 井上忠司・祖田修・福井勝義 (編), 文化の地平線——人類学からの挑戦 (pp.70-90). 京都：世界思想社.
- レイン, R. D. (1973). 経験の政治学 (笠原嘉・塚本嘉壽, 訳). 東京：みすず書房. (Laing, R. D. (1967). *The politics of experience and the bird of paradise*. Harmondsworth: Penguin books.)
- ルイス, O. (1986). サンチェスの子供たち——メキシコの一家族の自伝 新装版 (柴田稔彦・行方昭夫, 訳). 東京：みすず書房. (Lewis, O. (1961). *The children of Sanchez: Autobiography of a Mexican family*. New York: Random House.)
- Marantz, S., & Coates, S. (1991). Mothers of boys with gender identity disorder: A comparison of matched controls. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 30(2), 310-315.
- 松嶋秀明. (2002). 観察者の「私」の物語的構成——自身のフィールドワーク過程の再検討. 名古屋大学教育発達科学研究科紀要, 49, 17-29.
- マクダニエル, S. H., ヘプワース, J., & ドハティ, W. J. (編) (2003). 治療に生きる病いの経験——患者と家族, 治療者のための 11 の物語 (小森康永, 監訳). 大阪：創元社. (McDaniel, S. H., Hepworth, J., & Doherty, W. J. (1997). *The shared experience of illness*. New York: Basic Books.)
- McDermott, R. P. (1993). The acquisition of a child by a learning disability. In Chaiklin, S., & Lave, J. (Eds.), *Understanding practice: Perspectives on activity and context* (pp.269-305). New York: Cambridge University Press.
- Magnusson, D., & Stattin, H. (1998). Person-context interaction theories. In Damon, W., & Lerner, R. M. (Eds.), *Handbook of child psychology volume1: Theoretical models of human development, 5th edition* (pp.685-759). New York: John Wiley & Sons.
- マーフィー, R. F. (2006). ボディ・サイレント (辻信一, 訳). 東京：平凡社 (平凡社ライブラリー). (Murphy, R. F. (1990). *The Body silent: The different world of the disabled*. New York: W W Norton & Company, Inc.)
- 中塚幹也・小西秀樹・工藤尚文・永井敦・公文裕巳・光嶋勲・佐藤俊樹・山本文子・黒田重利. (2003). 岡山大学ジェンダークリニックにおける性同一性障害 121 症例の検討. 産科と婦人科, 70, 368-373.
- 日本精神神経学会性同一性障害に関する特別委員会 (委員長, 山内俊雄). (1997). 性同一性障害に関する答申と提言. 精神神経学雑誌, 99 (7), 533-540.
- 野口裕二. (2002). 物語としてのケア——ナラティブ・アプローチの世界へ. 東京：医学書院.
- 野口裕二. (2005a). ナラティブの臨床社会学. 東京：勁草書房.
- 野口裕二. (2005b). 臨床的インタビューの難しさ 経験 3. 桜井厚・小林多寿子 (編), ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門 (pp.119-122). 東京：せりか書房.
- Riessman, C. K. (1993). *Narrative analysis*. London: Sage Publication.
- 桜井厚・小林多寿子 (編). (2005). ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門. 東京：せりか書房.
- 佐藤郁哉. (2002). フィールドワークの技法——問いを育てる, 仮説をきたえる. 東京：新曜社.
- Savin-Williams, R. C. (1998). Lesbian, gay, and bisexual youths' relationships with their parents. In Patterson, C. J., & D'Augelli, A. R. (Eds.), *Lesbian, gay, and bisexual identities in families: Psychological perspectives* (pp.75-98). New York: Oxford University Press.
- 清水新二. (1992). アルコール依存症と家族. (現代家族問題シリーズ3) 東京：培風館.
- 荘島 (湧井) 幸子. (2006). 病いの研究をめぐる理論的考察と提言——新たな研究アプローチの模索. 教育方法の探究 (京都大学大学院教育学研究科教育方法学講座), 9, 57-64.
- スミス, D. (2004). K は精神病だ——事実報告のアナトミー (山田富秋・好井裕明・山崎敬一, 編訳). エスノメソドロジー——社会学的思考の解体 (pp.87-165). 東京：せりか書房. (Smith, D. (1978). "K is mentally ill": The anatomy of a factual account. *Sociology*, 12(1), 23-53.)
- 相馬佐江子 (編著). (2004). 性同一性障害 30 人のカミングアウト. 東京：双葉社.
- Stoller, R. J. (1971). Transsexualism and transvestism. *Psychiatric Annals*, 1(4), 60-72.
- Strauss, A. L., Corbin, J., Fagerhaugh, S., Glazer, B. G., Maines, D., Suczek, B., & Wiener, C. L. (Eds.). (1984). *Chronic illness and the quality of life. 2nd edition*. Toronto: Mosby.
- 土屋由美. (2004). 対話的關係の交渉と歴史としての「声」——ある脳梗塞患者の社会的機能の障害から考える. 石黒広昭 (編著), 社会文化的アプローチの実際——学習活動の理解と変革のエスノグラフィー (pp.129-152). (シリーズ社会文化的アプローチ) 京

都：北大路書房.

- 土屋由美. (2007). 生によりそう「対話」——医療・介護現場のエスノグラフィーから. 東京：新曜社.
- 梅津八三. (1997). 重複障害児との相互輔生——行動体制と信号系活動. 東京：東京大学出版会.
- 湧井幸子. (2006). 「望む性」を生きる自己の語られ方——ある性同一性障害者の場合. 質的心理学研究, 5, 27-47.
- Walton, M. B., Gerson, L., & Rose, L. (2005). Effects of mental illness on family quality of life. *Issues in Mental Health Nursing, 26*(6), 627-642.
- Williams, G. (1984). The genesis of chronic illness: Narrative reconstruction. *Sociology of Health and Illness, 6*(2), 175-200.
- Wren, B. (1999). Patterns of thinking and communication of families where an adolescent shows atypical gender identity organization. *International Journal of Transgenderism, 4*, <http://symposion.com/ijt/greenpresidential/green52.htm> (情報取得 2006/8/11)
- やまだようこ. (1996). 映画「羅生門」にみる証言の場の多重性——当事者・目撃者・傍観者の語り. 現代のエスプリ, 9, 188-194.
- 山内俊雄・庄野伸幸・加澤鉄士. (2001). 性同一性障害の心理的側面. 臨床精神医学, 30, 751-756.
- 矢守克也. (2007). 映像がもたらす客観的視点とは——『羅生門』と『キッチン・ストーリー』をめぐって (シンポジウム 20「現場が語る実践：ビデオ映像がもたらす対話的機能」). 第18回日本発達心理学会論文集, 166-167.

(2007.3.27 受稿, 2007.12.9 受理)